

## 第2章 物集女城の位置と自然・地形環境

大小縮尺2種（縮尺約1：10比）の主題図を用意し、物集女城とそれを取りまく地理的環境について図説する。

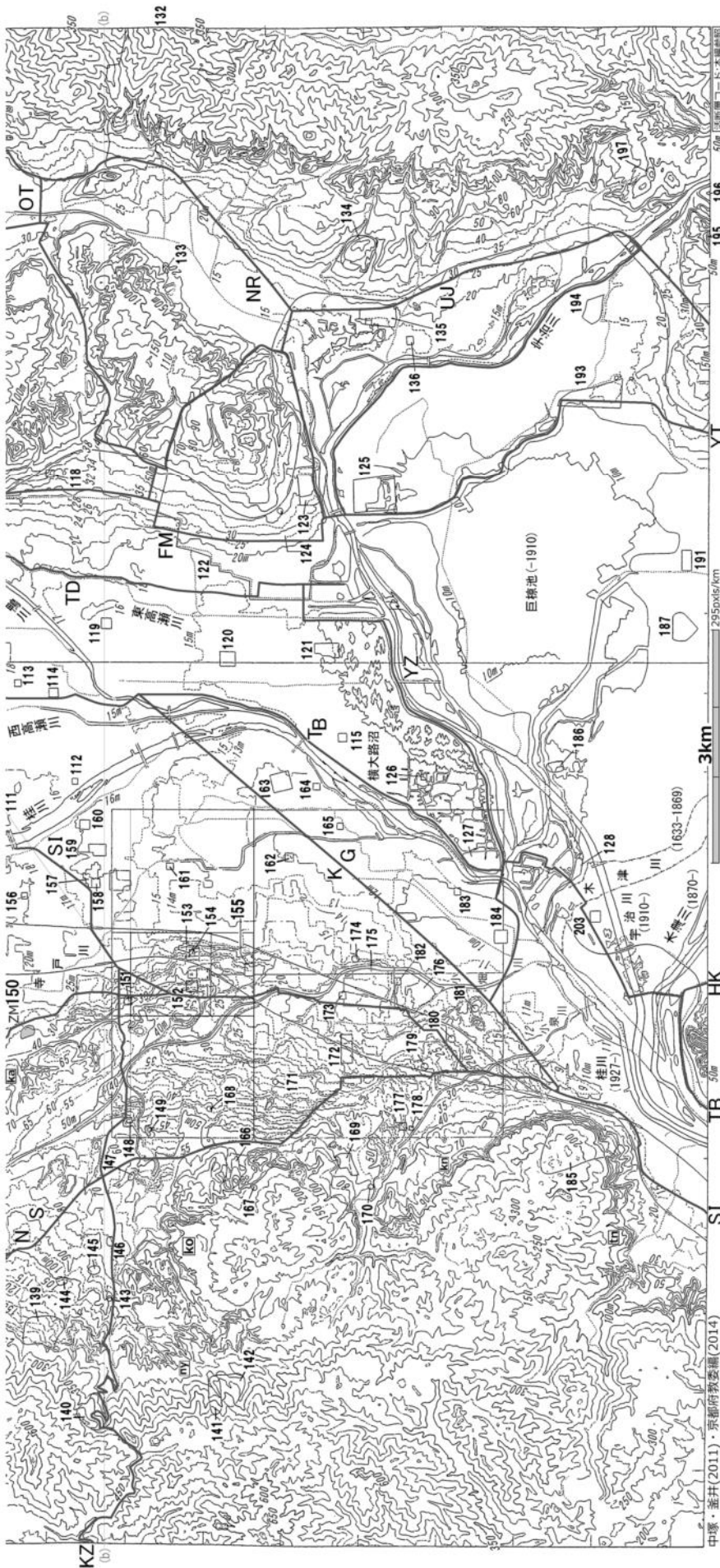
### 1 京都盆地のなかの物集女城（第15図、縮尺約1：77000）

京都盆地北部（「三川」合流域以北）の地形条件図に城館・城郭、構えをもつ寺院など戦国時代前後の遺跡をプロットする。遺跡は200地点をこえる。桂川右岸No.150遺跡コードZMが物集女城である。さらに、京に求心的に、また京と結節的に配置される街道筋を併せて描き込む。街道30事例をアルファベットコードで整理する。

〔物集女城の位置—地形と街道配置のかかわりから—〕 盆地の地勢、地形・地質構造と街道配置の関わりを総観しうる。縁辺域においてその関係は顕著である。断層活動によって形成される線状・帯状構造、また、地質的境界や構造的連続性に従い形成される稜線、谷と鞍部の線状の組み合わせは地点間のアクセスの至便性から古来利用されてきたと言える。京都盆地北西部低地の外縁は愛宕山南麓を直線的に南東に延びる谷筋から保津峡谷口の北において南に屈折し弓なりに延伸する檜原断層が地形的境界のひとつをなす。断層谷中に延びる「水尾道〔MI〕」から嵯峨〔SG〕・四条〔SJ〕街道末をつないで南の物集女街道〔MZ〕に至る街道群が断層に沿って配される。〔MZ〕は檜原断層末端において平安京南端九条御前から南西に延びる西国街道〔SI〕に結節後、そのまま直線的に南進する。桂川支流主河川である小畑川の低地と段丘面を経て、西山山地前縁の断層帯（光明寺・西山断層）沿いの街道、西山街道〔NS〕（古山陰道）につながる。丹波街道〔TM〕から京南もしくは大坂にいたるもう一つのルートである。さて今一度〔MZ〕に沿って北向きに目線を戻そう。「水尾道」〔MI〕の走向に併行し、第四紀以前の古い地質断層や組織地形的線状境界に沿うふたつの道が〔MZ〕と交差、また結節する。京と山陰海岸・南丹盆地方面をむすぶ主要道である丹波街道（山陰道）、戦略的要路とされる唐櫃越〔KB〕である。物集女城は南北向きの物集女街道と、京・丹波さらには南の摂津・大坂方面に至る街道との交差点間に位置することがわかる。街道要衝を城構えで固める存在であったことは疑いない。

〔旧京長岡京の記憶〕 地の利のかたちとしての街道配置と自然条件の関わりを概観したが、旧京、長岡京旧跡と街道・城館配置の関係性にも留意したい。まず物集女城と平安の都を結ぶ主要道のひとつ、西国街道〔SI〕と物集女街道、善峯・金蔵寺道〔KZ〕についてである。〔MZ〕・〔KZ〕交差点と、〔SI〕・〔KZ〕結節点を結ぶ東西向きの直線路は長岡宮北辺の遺存条坊に相当すると推察される。南の〔SI〕直線路においては上植野中筋（長岡京三条大路遺存推定）との交差点真東に戦国時代前期上植野城、西ノ岡衆の拠点として重要な向日神社の旅所が置かれる。さらに南方、勝竜寺城西縁にあたる西国街道の南北路は、振れ角を伴うものの条坊交差位置において屈曲をみせる。もう一度物集女城周辺域にもどって段丘上の街道筋および城構え（字「中条」：城郭遺存地割地名範囲）の向きについて確認しておきたい。城南には淳和天皇墓が祀られるが、墓域向きと街道・構えの方向約（約N 23°W）の併行性を看取しうる。次項第16図において細部を示す。旧跡との配置整合性をはかる意識の存在が示唆される。意図的な選地、





- 【愛宕郡】 6 室ノ庭(長坂)城跡 7 鎌倉寺城跡 8 御土居跡 9 大徳寺日境内 10 船岡山城跡 11 植物園北遺跡(上賀茂社家甲) 12 岩倉上蔵城跡 13 小倉山城跡 14 岩倉長谷城跡 15 岩倉花園城跡 16 三宅八幡城跡 17 八幡城跡 18 御蔭山城跡 19 延暦寺境内 20 修学院雲母坂城跡 21 一乗寺山城跡 22 一乗寺延暦寺山(一本杉西)城跡 23 北白川(瓜生山、勝重地蔵山)城跡 24 松ヶ崎城跡 25 渡辺前跡 26 田中構え跡 27 下鴨城跡
- 【葛野郡】 29 愛宕山遺跡 30 神護寺境内 31 高徳城跡 32 高山寺境内 33 嵯峨遺跡 34 大覚寺境内 35 嵐山城跡 36 蔵王神社城跡 37 広隆寺境内 38 妙光寺境内 39 仁和寺境内 40 等持院境内 41 真如寺境内 42 妙心寺境内 43 安井城跡 44 西院(小栗)城跡 45 松ヶ崎城跡(法蓮山寺跡) 46 峰ヶ崎城跡(法蓮山寺跡) 47 草嶋城跡 48 桂城跡 49 長福寺境内 50 梅津城跡 51 郡城跡(上京) 62 本満寺の構え跡 63 相国寺境内 64 新在家構え跡 65 日二条城跡 66 頂妙寺の構え跡 67 京都新堀跡 68 妙蹟寺城跡 69 妙蹟寺城跡 70 二条御新造(二条御新造、二条殿) 71 等持寺跡 72 三条坊門跡 73 本能寺城跡 74 日本能寺の構え跡 75 四糸道場(金蓮寺)跡 76 下京遺跡(下京構え跡) 77 吉田泉源町遺跡 78 神楽岡城跡 79 白河町区跡 80 知恩院境内 81 八坂神社境内 82 南津寺境内 83 東若倉山城跡 84 如意寺跡 85 如意ヶ藪城跡 86 中尾城跡 87 灰山城跡 88 妙蓮寺の構え跡 89 妙蓮寺の構え跡 90 本満寺の構え跡 91 たいいすの城跡 92 電燈城跡 93 中堂寺城跡 94 本園寺城跡 95 教王護国寺(東寺)境内 96 嵐小路若山城跡 97 建仁寺境内 98 六波羅置寺境内 99 六波羅置寺境内 100 嵐山城跡 101 阿彌陀ヶ崎城跡 102 清水寺境内 103 方丈寺跡 104 今村城跡 105 法住寺城跡 106 東福寺境内
- 【紀伊郡】 107 吉祥院城跡 108 吉祥院竹尾城跡 109 吉祥院政所城跡 110 吉祥院西ノ内城跡 111 石原城跡 112 嶋城跡 113 上鳥羽城跡 114 上鳥羽城跡 115 横大路城跡 116 城興寺城跡 117 九条河原城跡 118 寺本城跡 119 竹田城跡 120 芦山城跡 121 下三橋城跡 122 三橋氏伏見城跡 123 伏見城跡 124 月城跡 125 向島城跡 126 雷ノ森城跡 127 日産城跡 128 虎城跡
- 【宇治郡】 129 四手井城跡 130 山科本願寺跡 131 山科本願寺南院跡 132 醍醐寺境内 133 小栗稻城跡 134 松原城跡 135 西浦遺跡 136 同屋城跡 137 香掛城跡 138 勝持寺日境内 139 山科本願寺境内 140 金蔵寺境内 141 三船寺境内 142 善峰寺境内 143 長峰城跡 144 大原野田城跡 145 南春日町下西代遺跡 146 灰方城跡 147 上羽城跡 148 上里城跡 149 石見城跡
- 【乙訓郡】 150 物集女城跡 151 寺戸城跡 152 鶴冠井原寺跡 153 御屋敷遺跡(鶴冠井原城跡) 154 鶴冠井原城跡 155 西小路遺跡(上植野城跡・秋田館跡) 156 上久世城跡 157 下久世城跡 158 下久世城跡 159 大藪城跡 160 築山城跡 161 東三川城跡 162 羽東跡(山崎城跡) 163 久我東町遺跡 164 志木落合城跡 165 古川城跡 166 光明寺 167 観音寺(子守勝手神社) 168 井ノ内館跡 169 海印寺跡 170 海印寺城跡 171 今里城跡 172 閉田城跡 173 馬場城跡 174 古市城跡 175 近世勝龍寺城跡 176 中世勝龍寺城跡 177 慈光院境内 178 下海印寺遺跡 179 友明城跡 180 調子城跡 181 久貝城跡 182 神足城跡 183 水垂築山城跡 184 下津城跡 185 山崎城跡
- 【久世郡】 186 西一口(御物)城跡 187 市田城跡 188 市田城跡 189 市田城跡 190 市田城跡 191 安田藤森集落 192 小倉遺跡 193 小倉遺跡 194 榎島城跡 195 宇治東山山遺跡(宇治城跡) 196 院御所山遺跡(榎ノ尾山城跡) 197 朝日山遺跡(朝日山城跡) 203 美豆城跡
- (街道コト) AG: 愛宕街道 DG: 醍醐街道 SI: 四糸街道 SZ: 周山街道 TB: 鳥羽街道 TK: 東海道 TM: 丹波街道 WS: 若狭街道 YZ: 山崎街道 YN: 山中越 \* 足利編 (1994) 調整・補記
- SI: 西園街道 SG: 嵯峨街道 SI: 四糸街道 SZ: 周山街道 TB: 鳥羽街道 TK: 東海道 TM: 丹波街道 WS: 若狭街道 YZ: 山崎街道 YN: 山中越 \* 足利編 (1994) 調整・補記

第15図 京都盆地北部中世城館遺跡分布図・地形条件図

定位 (Location/Orientation) の可能性を指摘しておきたい。

〔用水配置・利用と物集女集落・物集女城〕 集落・城館の糧食を支える水資源、用水利用の特色を生産域の地形・地質・水文条件との関係から俯瞰しておこう。前述のように盆地西縁、乙訓地域の地勢を決める骨格のひとつは断層変位地形である。西から順に、中生代堆積物としての基盤岩からなる山地と大阪層群で構成される丘陵地境界および前縁 (西山 ny・金ヶ原 kn 断層)、丘陵/段丘面境界および前縁の扇状地面群 (光明寺断層 ko)、小畑川が貫流する盆状断層谷を介し、盆地の低地域側での最新の断層活動場である丘陵/段丘・扇状地面境界 (榎原断層 ka) の各断層と起伏面が分布する。東縁が榎原断層に縁取られる丘陵地「長岡」をはじめ、東方に傾動する丘陵地では、断層面延長方向における隆起・沈降パターンに差異がともなうブロック的な変動域(セグメント)が形成されると推察される。例えば「長岡」延長方向でのスカイラインは上下に波状の振幅をなす形状を示している。丘陵の形態が選択的な侵食作用のみで形成されたのではないことは、丘の背面に地質的不整合に載る、侵食性の卓越する高位段丘面構成層の高度分布のばらつきからも示唆される。鞍部状に背面がくぼむことから相対的に隆起量が小さいと考えられるセグメント域において、開析谷と扇状地が発達する傾向が看取される。扇状地下位には同時に旧石器時代の年代指標堆積物である始良 Tn 火山灰 (AT) を挟在する低位段丘構成層の積層を確認しうるケースが散見され、動水的条件下において拡散、逸失する火山灰層準を断層下盤 (盆地側) に保存しうる盆状の地形条件が維持されたと推察される (第 16 図)。同時に開析谷壁・谷頭から地下水が浸潤・供給される水文的条件も湿潤な堆積域を周辺に維持することに貢献したと推察される。断層活動にともなう基盤の上昇は同時に地下水脈も上昇させたと推察される。物集女城背域と城館存立基盤の地形発達史的条件に相当する。開析谷中にはこれら浸潤水によって涵養される溜池が構築され、断層性隆起をおこない高燥化した斜面～段丘面における灌漑水田開発に活用されていった。低位段丘面直下の沖積低地を貫流する桂川掛かり寺戸用水 (今井用水) からの引水権をもたない状況で物集女集落が谷池掛かりによる水稲耕作を維持、展開しえた恵まれた自然条件に相当する。同様の地形・水文条件をもつセグメントの存在を示唆する開析谷は物集女を含め開析谷口間隔で 0.7km 前後の距離をおいて配列している。物集女南方の仮称「はりこ池谷」、北方には同「須大寺池谷」、さらに北の「榎原新池谷」と続く。物集女城はこれら谷池掛かりエリアの中央に築造された。

物集女城時代 (16 世紀後半) また城館成立以前の西ノ岡衆活動時代に直接かかわる当該地域の生産実態は考古学的成果からなお明らかにしがたいが、地下水涵養型谷池がかり用水の成立は発掘成果をてがかりに段丘面上の灌漑水田遺構の構築状況・年代から、13 世紀後半以降整備がはじまり 14 世紀代中葉頃に展開期をむかえたと推察される (次項参照)。近年の成果に従えば、榎原断層末端段丘上の上植野集落の生産を支えた小畑川河谷低地の流路帯の改造、小畑川用水群の整備過程の時代に重なる (長岡京跡右京第 1115・1124 次)。また、桂川本線の河床条件変化を記録する文献的成果では、丹波街道 [TM] 以北の川沿いにあたる上野における河原 (氾濫原: 1316 年) から東寺領上野庄 (農地記載: 1419 年、14 世紀末～15 世紀前半か) 成立の記録が存在する。<sup>(文献 5)</sup> 流路の離水化による可耕地の拡大 (新田開発) は本流的河道の固定化を条件にすすめられたと推察されるが、同時にそれは山間林地の過度の開発と複合し河床の異常な上昇をもたらすこととなったと推察される。天井川時代の到来である。つづく 15～16 世紀、物集女の池掛かり灌漑状況を示す直接のデータは得られず、また、断層地形を伏流する地下水の

歴史的変動についても未知である。上述の桂川水論における河況記録にあわせて、京の旱魃・濁水発生頻度、淀川・鴨川における洪水発生頻度といった自然災害記録を参考に自然地理的背景として整理しておく。15世紀前葉、本流河床、沖積低地縁辺が開析され、用水取水位置維持が困難となって争論が勃発する。洪水発生頻度が大きく上昇する傾向を認める。出水の頻出は川の側壁を侵食した可能性を示唆する（段丘崖形成）。気候条件変化として丘陵地を含めた広域における出水の増大は溜池堰堤への過貯留にともなう負荷を高めた可能性を想起しうる。

なお時代は遅れるが、物集女城堀底堆積物（16世紀末～17世紀初期）の花粉分析成果は周辺域における広葉樹林分の卓越する二次林が維持される状況を示唆<sup>(文献6)</sup>した。物集女地域の森林維持・保全の状況を窺うことができる。地下水浸潤域の林分による保全が池掛かり用水利用の要件であったか。他方、物集女南方「はりこ池谷上部」の谷底では近年、土砂留め堰堤と推察される遺構を確認した。遺構の構築年代不明であるが、堤体上流側の滞留シルト質砂質堆積物にともなう材の<sup>14</sup>C年代はA D 1761 - 1803y (2σ 1位)・1778 - 1799y (1σ 1位)の暦年較正值を示した。物集女の谷地における同様の確認例を知りえないが、近隣開析谷における遺構の存在は、近世山間地利用における山荒れリスクを物語っている。

## 2 物集女城と周辺の自然と土地条件（第16図、縮尺約1：6900）

〔地形・地質条件〕 第16図（a）に中海道遺跡・物集女城周辺の地形条件と調査区配置を示す。<sup>(文献7)</sup>さらに字「中条」（中之條、「城ノ内」の転びと解釈）の輪郭を白抜き太線で描き込む。併せて、前述後半の谷水利用史に関わる図説をかながみ、物集女城成立基盤となる丘陵地の開析＝段丘上の扇状地形成の関係史、水資源利用史の成果について囲み記事的に図中に貼付する。

地形条件について、西の上位から東方盆地側下位に向けて、高位段丘面、檜原断層撓曲崖（丘陵斜面）、高位面を刻む開析谷、開析谷口を主たる扇頂とする扇状地、扇状地性堆積物（丘陵・高位段丘の二次堆積物）に被覆される低位段丘、桂川沖積低地（氾濫原）の各配置を確認しうる。各地形面の地勢、年代、利用の履歴を概述する。

**高位段丘：**大阪層群上部層（花崗岩物質主体、低い割合で堆積岩・火山岩類随伴）を侵食し不整合に覆う赤橙色系礫層からなる。基質は泥質～砂泥質で京都盆地周辺基盤岩類同様の堆積岩質礫で構成され、下位の大阪層群相当層と堆積物の供給元、運搬方向が全く異なる。当地域において段丘層／大阪層群境界層準の状況は不明であるが、南方、大牧地内（第15図：長岡京右京域における善峰・金蔵寺道〔KZ〕通過位置、大規模住宅街切土地縁辺）においてこれまで2地点で確認されている。<sup>(註3)</sup>詳細分布調査第18187次では、巨礫クラス（最大1m弱）の大阪層群由来の角形シルト質偽礫群が段丘層最下部層準において覆瓦構造状の配列をもって認められた。南方への段丘層積層時において下位シルト～砂礫互層（トラフ型斜交葉理発達、北向き積層）をおおきく剝削・下刻したと推察される。層厚約7～8mと薄い。層相から扇状地性堆積物と推察される。侵食性の堆積面形成と、つづく変動過程において構造的な段丘面形成がなされたと推察される。

**撓曲崖：**高位段丘堆積物からなる高低差約40mの急傾斜面である。西方、小畑川河谷側では河岸段丘状の崖が形成され、高位段丘堆積物積層以降の地形面の傾動を理解しうる。檜原断層本体の直接の活動痕跡はこれまで確認しえないが、低地から開析谷主谷に至る東西側線（府道中山稲荷線）における反

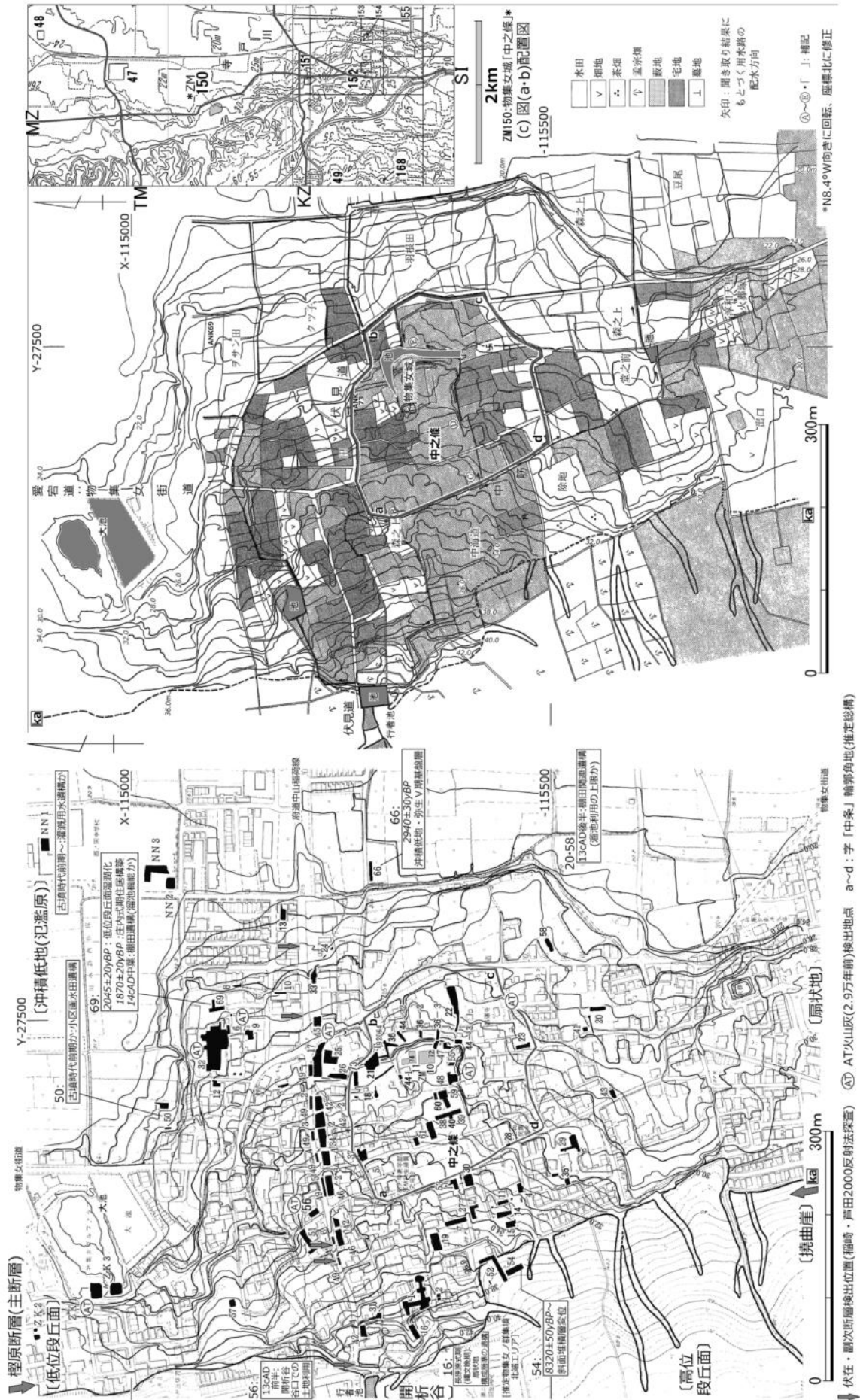
射法探査結果にもとづく地質資料の再解釈は主断層位置のほか、低位段丘～扇状地面下に伏在する副次断層群の存在を明らかにした。検出位置を示す(図中下矢印位置)。うち、西端想定主断層位置の撓曲崖走向延長において実施された中海道遺跡第 54 次では、高位段丘層を被覆する土壤帯( $^{14}\text{C}$ 年代:  $8320 \pm 50\text{yB.P.}$ )を切る溢流性堆積物を高角に直立させる層序の変形(堆積物:  $8800 \pm 40\text{yB.P.}$ : 前記下位層準と年代値逆転)が確認された。<sup>(文献9)</sup>また、これに先立つ第 16 次調査(主断層やや東方地点)では、扇状地面構成層中において縄文時代晩期長原式期土器を埋め置く土坑状遺構が検出され、扇状地面縦断形の不連続性から落差約 1.3 m の垂直変位を履歴する可能性を指摘した。<sup>(文献10)</sup>断層活動履歴にもとづく活動再来周期、活動度の判定情報の入手、蓄積が今後とも必要であろう。

扇状地・低位段丘: 始良 Tn 火山灰(AT: 較正年代約 2.9 万年前)検出地点の分布を示す。中海道遺跡北方、北ノ口遺跡における遺存条件良好な地点[ZK 1]を除いていずれも厚さ数cmの薄層また偽礫相層準として確認されるが、前述の盆状の断層変位をおこなうセグメント域として逸失を免れたと推察される。段丘面～扇状地の水文条件を示す成果について、遺跡層序(第 69 次)・遺構検出例(推定表層浸潤水掛かりの小区画水田遺構: 第 50 次)がある。高台上の湿潤的条件下(地下水流出量増大か)の時代として其々弥生時代中期末/後期初頭(2045yB.P.)、古墳時代初頭～前期が知られる。他方、沖積低地面形成年代の成果に第 66 次(2940yB.P.: 縄文時代晩期初頭)がある。前述、第 16 次例をあわせて縄文時代晩期において本流の流量増加にともなう地形面形成がおこなわれた推察される。<sup>(文献11)</sup>

水資源利用の画期～棚田景観の成立から城館立地～: 段丘面南部における灌漑水田痕跡検出例として第 20・58 次(13 世紀後半下限)、北部第 69 次(14 世紀中葉下限)を示す。後者は暗渠施設をともなう二毛作仕様の棚田遺構であり、沖積低地の集約的耕作地管理同様の農業土木的技術の行使にあたる。なお開析谷における溜池構築に関わる直接の情報はこれまで得られていないが、上述灌漑水田遺構の考古年代を傍証として活用しうると推察される。なお、谷中水制御の上限を示す可能性のある成果に第 56 次がある。<sup>(文献7)</sup>ここでは谷口直近の扇央部において盛土遺構(13 世紀前半)を検出しえた。扇央部における推定生活利用場に対する谷中からの不意の出水リスクは溜池堰堤構築によって改善されると推察されるが、上記の灌漑水田遺構の年代をややさかのぼる年代観である。なお、14 世紀以降の水資源利用の痕跡をこれまで見いだせず、桂川水論資料の検討から推測するほか手だてがないが、扇状地伏流水を灌漑・防御のために城堀において「要水」として複合利用する時代、それが物集女城の時代であった。

〔中之條総構モデル〕 第 16 図(b)として、明治 10 (1877) 年地籍図の編集図を第 16 図(a)に方位・縮尺を整え重ね合わせる。地形条件図のコンター・国土座標系および「中之條」輪郭(変則矩形角地: a～d 付記)を転写する。ANK69・73 と調査コードを書き込むのは当初の作図の契機であった。地点 b が交通上の要所、物集女街道・伏見道交差点である。物集女街道が東に孕むが(a)との比較で直線的に短縮されたことが分かる。また a～d アウトラインが地域の通り名「中筋」にあたる。伏見道は字界北辺沿いに弱くクランクしながら西進し角地 a 手前で北折れ更に西折れし開析谷口に向け扇状地面をのぼる。「池」は行者池を指し、扇状地面の浅い谷線に設けられる下受け池に接続する。谷地全体にとっての「余水吐け」(出水時の排水路)に相当すると考えられる。<sup>(文献6)</sup>

さて、前項では「中之條」地名から「城ノ中」すなわち城郭の輪郭を想起した。調査成果と推定遺存地名の関連性を指摘した嚆矢は北辺 a～b 西部の第 37 次調査であった。<sup>(文献13)</sup>ここでは調査区字界側におい



第16図 物集女村地籍図と物集女城

て界線に併行する形で石組みを伴う溝、溝掘削時の排土を利用したと解釈する段状盛土遺構（構成層：13 世紀後半～14 世紀、瓦器型式指標）が確認された。遺構機能を集落区画溝および「土塁」<sup>(註4)</sup>基底と推測する。北辺東部において近年実施の第 73 次ではアールを描く字界に沿う形で土居(塁壁)<sup>(文献14)</sup>基礎地形(業)を想起させる盛土遺構を確認しえた。礫質土や扇状地礫層の生土を用い外縁側に暗渠排水溝を備える。盛土に 16 世紀後半代土師器皿資料がわずかに伴う。限られた調査範囲であるが、中之條北辺街道内側に防壁をめぐる可能性を想像させる成果となった。外郭的な連壁構造をなさないまでも、水堀と塁壁を備える内郭のさらに外縁に、特に街道筋や中筋側をかためる総構的施設配置を施した可能性に留意したい。

#### 註

- (註 1) 今回、城館群と京の配置関係性を読むべく『京都アトラス』街道を地形条件図に重ね描きするが、街道とは公道であり戦国期において戦略上活用された道筋はあまた存在することは想像に難くない。例えば京口接続の鯖街道のひとつ、若狭街道〔WS〕は花折断層が形成した断面 V 字形の高野川谷底ルートであり、有事に逃げ場なく被攻撃のリスクは極めて高いと推断される。他方、岩倉盆地経由で大原方面に抜ける見晴らし良好の峠道、瓢箪崩山ルート群は労力はかかるがリスク回避のため古くから利用されたと推察される。近江への東山越えも、東海道周辺に収れんすることなく同様であろう。『アトラス』は織田信長の上洛路、山中越〔YN〕の活用可能性を説くのも同じ観点と思われる。したがって実戦に使用された潜在性をもつルートすべてを編集する「戦国時代戦略的テーマ図」を作成する上では重要な観点と推測される。
- (註 2) 但し墳墓外装の後代における改造の可能性の指摘がある（梅本康広教示）。
- (註 3) ①長岡京跡右京第 637 次（1999.6 月）：文献 10 に層序断面図（第 6 図 /67 頁）掲載。  
②詳細分布調査第 18187 次（2019.2.8 - 2.10）：『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 112 集収載対象。
- (註 4) 「土塁」について土を材料とする城の防壁として考古学的に呼称するが、塁とは土を盛り上げたマウンド、土でできた砦そのものを指すと言える。既存には土居が土塁にあたる。汎用的には要塞の土手に対し塁壁 rampart という呼称が存在する。造語せず土居もしくは塁壁を用いたい。

#### 文献註

- (文献 1) 中塚良・釜井俊孝『長岡宮都図譜～都の自然景観と防災の考古学～』図書印刷同朋舎 8 頁 2011 年
- (文献 2) 京都府教育委員会編「中世城館分布図」『京都府中世城館調査報告書第 3 冊山城編 I』2014 年
- (文献 3) 足利健亮「京都に求心する街道」同編『京都歴史アトラス』88-89 頁 中央公論社 1994 年
- (文献 4) 植村善博『京都市周辺の地震災害危険度マップの作成・平成 9 年度京都市震災対策調査研究報告書』70 頁 1998 年
- (文献 5) 中塚良「治水の景観考古学的研究－京都盆地中北部地域の遺跡調査成果から－」『立命館大学考古学論集』V 303-318 頁 2010 年
- (文献 6) 國下多美樹・中塚良・辻本裕也「物集女城跡第 2・3 次（9 Z M A N Y - 2・3 地区）・中海道遺跡第 36・44 次（3 N N A N K - 36・44 地区）～中海道遺跡中央部、物集女城東堀・張出部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 60 集 183-217 頁
- (文献 7) 中塚良「中海道遺跡第 56 次（3 N N A N K - 56 地区）～中海道遺跡北部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化



- 財調査報告書』第60集 227-245頁 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2003年
- (文献8) 稲崎富士・芦田譲「トンネル施工管理を目的とした京都西山断層系樫原断層の高分解能S波反射法探査」『平成11年度活断層・古地震研究調査概要報告書』(地質調査所速報 no.EQ/00/2.165-177頁) 工業技術院地質調査所 2000年
- (文献9) 松崎俊郎・古環境研究所「中海道遺跡第52・54次(3NNANK-52・54地区)～中海道遺跡(南西部)～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第67集 59-75頁 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2005年
- \*現地観察記載・所見：中塚2000.11.24スケッチ資料拠。
- (文献10) 國下多美樹・中塚良「長岡宮の地形と造営～丘と水都～」『財団法人向日市埋蔵文化財センター年報 都城』14 53-88頁 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2003年
- (文献11) ・中塚良・辻本裕也「中海道遺跡第69次(3NNANK-69地区)～中海道遺跡北東部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第105集 63-115頁 公益財団法人向日市埋蔵文化財センター 2017年
- ・國下多美樹・環境考古研究会「中海道遺跡第50次(3NNANK-50地区)～中海道遺跡北端部～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第52集 189-204頁 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2001年
- (文献12) ・中塚良「中海道遺跡第20次(3NNAMM地区)～中海道遺跡(南端)～発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第69集 241-253頁 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2009年
- ・山口均・辻本裕也「中海道遺跡第58次調査(3NNANK-58地区)～中海道遺跡南東部～発掘調査報告～」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第60集 247-282頁 財団法人向日市埋蔵文化財センター 2003年
- (文献13) 國下多美樹「中海道遺跡第37次(3NNANK-37地区)～中海道遺跡中央部～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第44集 197-215頁 財団法人向日市埋蔵文化財センター 1996年
- (文献14) 中塚良・梅本康広「(13) 中海道遺跡第73次(3NNANK-73地区)～中海道遺跡中央部～」『財団法人向日市埋蔵文化財センター年報都城』29 42-43頁 2018年